

国際シンポジウム

「かたち」再考——開かれた語りのために」を踏まえて

二〇一四年一月、東京文化財研究所企画情報部は国際シンポジウム「かたち」再考——開かれた語りのために」を開催した。文学や音楽といった一見「無形」のものや位置づけられる分野でも用いられる「かたち」をキーワードとし、あえてその言葉を明確に定義せずに、美術、建築、考古、文学、芸能を含むさまざまな分野の研究者を国内外からお招きして、各専門の視点から「かたち」について語っていただいた。何度も繰り返し述べられてきたように一九八〇年代末から美術史学の語りの変化のなかで、今一度ものを見ること、語ることは何かを考えてみようという意図が、そこにはあった。

岡倉天心が中心となって記された日本で初めての官製美術史『稿本 日本帝国美術略史』（一九〇一年）は、日本にも西洋で言う「美術品」が古くからあることを示すべく、古代から近世までの社寺宝物を対象として、その作品が生まれる社会歴史的背景を述べている。そうした作品列伝的な語りに対し、一九二〇年代後半に矢代幸雄がジョヴァンニ・モレリの様式比較の方法を基とする西洋的作家・作品論を日本に紹介し、様式比較による作家・作品論のための美術図書館を設立させるとともに、『美術研究』を創刊して、文献資料と作品図版を総合した作家・作品研究の実践を示した。今日、日本における美術史学は厚い調査研究の蓄積を有している。一方、方法論に関して言えば、西洋の美術史学の方法を日本東洋美術に適用する試みが続けられてきていると言つてよいであろう。

しかし近年、いわゆるポストモダン主義の動きのなかで、西洋的な分類や、もの・ことに対する視点、認識の方法論への懐疑が生まれている。制度史の発端となった「美術」概念の受容史の跡付けも、時代や国を超える概念と思われる「美術」が、西洋概念の日本的受容の産物であったことを明らかにしたのであり、ポストモダン主義の思潮と通じている。

こうした制度史の成果を踏まえ、ふたたびモノについて語る糸口を見出したい。

国際シンポジウム「かたち」再考——開かれた語りのために」を踏まえて

各分野での語りを相対化してみることで、何かが見えるのではないか、その際に一つの切り口を設定することでより比較がしやすいのではないか、というのが本シンポジウムの趣旨であった。

「かたち」を切り口とし、冒頭にイケムラレイコ氏と当所の田中淳の対談を行つて、「かたち」の作り手の声を聞き、セッション1「群れとしての「かたち」」では複数を対象とすることで認識される「かたち」を、セッション2「個としての「かたち」」では突然変異のように他に類例を見ない「かたち」を、セッション3「かたち」を支えるもの」では、「かたち」の背景にあるものを対象とした。シンポジウムでの発表と討論は、報告書『かたち』再考 開かれた語りのために』（平凡社、二〇一四年十二月）に収録されているので、ご参照いただきたい。

もとよりこのシンポジウムは問題提起を目的としており、三日の議論で何かの結論が出たわけではない。二〇一四年三月十三日、シンポジウムでの指摘を振り返る研究会を開き、さらに議論を深めた。そこで確認された問題には、新たな試みの方向として、テキスト／コンテキストの二項対立の再検討（インターテキストチュアリテイ等）、有形／無形の分類と差異化に関する再検討、作品個々の自立性を前提とすることの再検討（作品が置かれる場、使われる場の問題等）などがある。その研究会のなかで、セッション司会者をお願いした藤川哲氏、佐藤直樹氏にシンポジウムを踏まえて「かたち」をテーマにお話いただくという提案がなされ、お二方にご快諾いただき、二〇一四年五月二十二日に東京文化財研究所にて、左記のご発表をいただく研究会を開催した。

「現代美術におけるかたち——国際美術展を中心に」

藤川 哲

「かたち」をめぐる日本美術史の可能性——西洋美術史からの視点」

佐藤直樹

いずれのご発表も、先にあげた問題点に関わり、「かたち」をとらえ、語ることにしている示唆に富むもので、研究会に参加したわれわれは、その場で消えていく音を介しただけでは内容を十分に把握しきれず、そこで両氏に趣旨をご理解いただき、発表内容を踏まえ、改めてご執筆を賜った。

「かたち」の再考は緒についたばかりである。これからも分野をまたぎ、語りを開いていく試みを続けていきたい。

（山梨絵美子）